

日本はデフレ経済から抜け出せず、経済を成長軌道に乗せることができない。競争力にも陰りが見える。サブプライム問題に続いてギリシャ財政危機の影響を受け、国内では、政治にリーダーシップが見られず、さらに東京電力福島第1原子力発電所の事故も加わり、国家の存続の危機すら論じられている。行き詰まり状態である。

その中で、アダム・スミ

危機・先人に学ぶ アダム・スミス

見えざる手の真意

やさしい経済学

ス（1723〜90年）が注目されている。スミスと聞けば、誰でも浮かぶ言葉が「見えない手」もしくは「見えざる手」であろう。

自分自身の利益を追求することによって、彼はしばしば、実際に社会の利益を推進しようとするばあいよりも効果的に、それを推進する（水田洋監訳）とある。

メカニズムを重視する新古典派経済学が繰り返す批判される。自由放任で、倫理面を無視する経済学が金融危機をもたらしたのだという批判などである。



京都大学名誉教授 西村 和雄

たわけでもない。彼は英グラスゴー大学の道徳哲学の教授であった。「国富論」は76年に出版されているが、その17年前、59年には「道徳感情論」を出版している。スミスが倫理や道徳を重視していたことは容易に想像できる。

そして、「国富論」は「道徳感情論」の内容と矛盾したものではない。そのうえ、62〜63年にはグラスゴー大学で法学の講義を行っており、その講義の内容を再現した書も出版されている。実際のアダム・スミスは、一般に思われているよりも、視野が広い、バランスが取れた研究者である。

新古典派経済学を念頭に置いて、スミスの経済学と影響を再検討し、現代が何を学ぶべきかを考えることには意味があるであろう。

にしむら・かずお 46年生まれ。ロチェスター大博士。専門は数理経済学